

平成 26 年度

第 59 回 長野県中学校連合教科研究会

英 語 科

I	研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	趣 旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名	2～3
IV	研究問題と協議内容・・・・・・・・・・・・・・・・	3～11
V	本年度研究会の反省と来年度の方向	11～14
VI	あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・	14

I 研究テーマ

「コミュニケーションの基礎を養うための授業の構想化と評価のあり方」

II 趣旨

- ・ 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に育成するための場面設定や評価方法について具体的に学ぶことができるようにしていく。
- ・ 指導要領の改訂（年間の指導計画の検討）、小中の連携についても考えていけるようにしていく。

III 参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名

【第1分科会】

指導者	宮下 佐知子 先生（南信教育事務所指導主事）	
司会者	池田 司 先生（松本市立筑摩野中学校）	
記録者	武井 香奈江 先生（岡谷市立岡谷北部中学校）	
世話係	内田 昌宏 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）	
中学校名	研究の趣旨	発表者
芦原中	学んだ言語材料を活用する力を高める対話活動の指導のあり方～英語で表現する力の向上を目指して～	武井 理美
南箕輪中	4領域の「基礎・基本の定着」を図り、生徒たちが意欲的に活動に取り組めるような授業を工夫する	遠藤 葉
両小野中	英語科における学び合いを目指した少人数学習はどうあったらよいか	伊藤 尊夫
塩尻中	既習事項を活用し、自分の考えや思いを進んで表現しようとする生徒を育てるための指導はどうあったらよいか～学習内容の定着を目指した個に応じた学習形態の工夫を取り入れて～	宮澤 永
筑北中	コミュニケーションにつなげる音読指導の工夫	宮坂 晃
豊科北中	基本事項を使って、友と関わりを持ちながら場面にあった英語でコミュニケーションがとれる指導のあり方	笠井 勇也
附属長野中	話を展開する力を高める指導の在り方	櫻田 智也
附属松本中	相手の思いを受け止め、自ら表現を獲得しながらコミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習	内田 昌宏

【第2分科会】

指導者	細江 洋司 先生（東信教育事務所指導主事）	
司会者	深井 信雄 先生（松本市立清水中学校）	
記録者	宮澤 優 先生（信州大学教育学部附属松本中学校）	
世話係	木下 耕一 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）	
中学校名	研究の趣旨	発表者
岡谷北部中	既習表現を使う指導のあり方	竹内 大輔
両小野中	英語科における学び合いを目指した少人数学習はどうあったらよいか	伊東 昌徳
筑北中	コミュニケーションにつなげる音読指導の工夫	山田 綾子
豊科南中	英語が使えた・わかった喜びが持てる授業につながる指導のあり方はどうあればよいか～グループやペアでのコミュニケーション活動を通して～	長瀬 嘉久

坂城中	自分が伝えたい内容がより正しく読み手に伝わる英作文指導のあり方	島田 瞳
附属長野中	話を展開する力を高める指導の在り方	木下 耕一
附属松本中	相手の思いを受け止め、自ら表現を獲得しながらコミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習	宮澤 優
高陵中	主体的な学びを育てる学習指導のあり方～この追究が深まる学習形態のあり方～	望月 正樹
櫻ヶ岡中	英語でコミュニケーションしようとする意欲を高める指導のあり方	龍野 雄祐

【第3分科会】

指導者 三井 康幸 先生（中信教育事務所指導主事） 司会者 平野 朝将 先生（松本市山形村朝日村中学校組合立鉢盛中学校） 記録者 神津 明夫 先生（諏訪市立諏訪中学校） 世話係 橋爪 祐一 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）		
中学校名	研究の趣旨	発表者
諏訪南中	既習表現を使い、目的を持って自己表現し、友と学び合うことができる学習はどうあるべきか	立沢 志帆
広陵中	共に育つ生徒～個の自主的な学びを支える共学のあり方～	橋 瑤
豊科南中	英語が使えた・わかった喜びが持てる授業につながる指導のあり方はどうあればよいか～グループやペアでのコミュニケーション活動を通して～	岡田 直也
戸倉上山田中	一人一人が学びの充実感を感じる授業づくり	秋山 千晶
附属長野中	話を展開する力を高める指導の在り方	橋爪 祐一 片桐 梨奈
筑摩野中	英語の基礎的な読む・書く・話す・聞く力を培うための指導のあり方～英語を使って「伝える」ことへの取り組み、生き生きと取り組める英作文指導のあり方～	小林 恵子
筑北中	コミュニケーションにつなげる音読指導の工夫	野澤 昌史
丸ノ内中	まとまりをもって考えを表現できる力を育成する指導のあり方～コミュニケーション活動とドリル活動の指導の工夫を通して～	岩村 仁基

【第4分科会】

指導者 清水 秀明 先生（北信教育事務所主任指導主事） 司会者 富山 貴子 先生（上田市立上田第一中学校） 記録者 金原 悠 先生（松本市立鎌田中学校） 世話係 矢野 司 先生（信州大学教育学部附属長野中学校）		
中学校名	研究の趣旨	発表者
長峰中	伝え合う楽しさを味わいながら確かな力がつく指導のあり方	小田 佑弥
開田中	小中がそれぞれの役割を確実にやりきって、確かで豊かな素地と基礎を育成するための指導のあり方	桐井 誠
両小野中	英語科における学び合いを目指した少人数学習はどうあったらよいか	鈴木 仁子

筑北中	コミュニケーションにつなげる音読指導の工夫	上野平 結
豊科南中	英語が使えた・わかった喜びが持てる授業につながる指導のあり方はどうあればよいか～グループやペアでのコミュニケーション活動を通して～	清水 優太郎
信濃中	読解力や表現力を高めるための音読指導のあり方～小中一貫校、異学年との交流を通して～	丸山 美和
附属長野中	話を展開する力を高める指導の在り方	矢野 司
附属松本中	相手の思いを受け止め、自ら表現を獲得しながらコミュニケーションの喜びを実感していく英語の学習	矢島 裕文
上田第三中	一人ひとりの力に応じて自分の気持ちや考え、事実を相手に正しく伝わるように表現することができる指導のあり方～話す力から書く力へ～	古川 智基

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会】

討議題1『話すこと』の指導と評価のあり方（1）

- (1) 表現する力、特に話すことに重点を置いた指導を行っている。1年生の授業は all English で行い、帯活動に short talk を取り入れている。簡単な質問の応答が多いが、表現集などを見ずに会話が続けられる姿がある。生徒が本当に表現したいと思っていることを、既習表現を用いて話す力をつけるにはどのようにしたらよいか。（芦原中）
- (2) 生徒が意欲的に取り組める場面設定の工夫を大切にしている。パスポートを作り、生徒同士で入国審査の会話を行う場面を設定した。目的意識や見通しが持てたことで、意欲が高まり、話すことに手ごたえを感じている生徒の姿があった。目的意識を持ってオリジナルの文章を作り、それを覚えて言うことで、力がついたと感じている。（両小野中）

<指導者の先生のご指導>

- (1) どうなると対話を続けたことになるのか生徒がイメージできるように、つける力の具体の姿を明確にした上で、場面設定を行うことが重要。生徒が表現に十分に慣れ、定着することが自信になり対話への意欲づけになる。活用場面では、実践的になるので対話がスムーズに行えないこともあるかもしれない。テンポよく会話をすすめることよりも「伝えたい」という気持ちを大切に指導する。
- (2) どのような力がつくのかが明確になっていないと、1時間の学習がその場限りで終わってしまう。教師が Lesson goal と Today' s goal のつながりを意識して授業を行い、生徒にも伝えていく必要がある。スキットなどの暗記は、定着の度合いをはかるための確認のために行うもので、つける力の評価ではない。覚えた表現を、つける力に向けてどう活かしていくのか、そのつながりを生徒にきちんともたせると、学習に意味が出てくる。

討議題2『話すこと』の指導と評価のあり方（2）

- (1) 話を展開する力を高めるために、新聞づくりに必要な情報を友達から聞き出すインタビュー活動を行った。どのような情報を聞き出すかの観点を、「I - Point」と名付け、質問を考えたり続けたりするための手立てとした。また、2ペアをセットにし、互いのインタビューを見合い、アドバイスを出し合って再度インタビューの質問を考えることで、2回目のインタビューではより詳細な情報を聞き出したり、2分間会話が続けられていたりする生徒の姿があった。（附属長野中）
- (2) 生徒が積極的に「英語で話したい」と思ったり、「英語で話せてよかった」と実感できたりするために、改めて生徒の願いや実態を丁寧に見とり、生徒に寄り添った単元展開を行ってきた。聞き

手の設定, グループでの事前練習, 明確かつ具体的な評価の提示, 客観的な視点での評価, warm-up の工夫など, 子どもの実態に即した学習活動を行うことの重要性に気づいた。(筑北中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 実際の学習内容は生徒に「話題に関連させた話の続け方」を考えさせ, そのための Q を作らせる活動になっている。そのための Q-making として, 質問の内容を決める観点を示したことで, 子どもたちが質問を考え易くなっている。ただ, 質問のための質問になっていて, インタビューとして相手の何が知りたくて考えられた質問なのかが分かりにくい。子どもたちも, 「この質問が考えられたことで, こんな力がついた」ということが見えにくい。そこを明確にしていけるとよい。
- (2) 教師の授業観を見返す研究を紹介していただいた。授業で見せる子どもの学びの姿を知ろうとすればするほど, 子どもの意識と教師側のねらいにずれがあることを赤裸々に綴ってくださっている。ねらい→めりはり→見届けの組み立てで, 授業の終末での評価する姿を決めだしたら, 子どもの思考が本当にこの学習の流れで良いのかを終末場面から逆にたどって, ねらいとつながっているかを確認する, というやり方は大いに参考にしたい。

討議題3「生徒同士が関わりを持ち, 学ぶための指導」

- (1) 効果的な TT の組み方はどのようにしたらよいか。本校では月 1 程度で, JTE が 2 名, ALT が 1 名, 計 3 名で 1 クラスの授業を行うことがある。また, 2 人での TT はほぼ毎時間行えるが活用しきれていない。(その後, 討議にて, JTE の良さや ALT の良さについて意見を出し合った)(塩尻中)
- (2) 英語を使わざるを得なかったり, 知っている表現を総動員して話そうとしたりする場面設定を行った。外国人が多いという松本の特性を生かし, 松本に来た旅行者向けのパンフレットを作る活動を通して, コミュニケーションの喜びを実感できた生徒の姿が見られた。(附属松本中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 漠然と「ALT はいた方がよい」と思っていることを, ALT の効果について, あらためて文字にして書きだしてみると色々な視点があることに気づける。各学校で, 教科会において, また ALT とも, 今日やったような活動を行うと, 新たな ALT や TT の活用法が見いだせるかもしれない。
- (2) 生徒の生活や文化はその地域に根付いているものなので地域素材を学習に生かしていくという視点は大切にしたい。姉妹都市との交流や国際交流課, 企業等に尋ねてみるのもよい。3 年間の中で 1 回くらいは実践の機会がもてるとよい。授業のはじめでは, つなぎ言葉, メモしながら聞いたり質問したりしようと, インタビュー活動を通してつける力について述べているのに, レポートでの教師の評価は, 内容面に焦点が当てられている。つける力がその活動を通してどう伸びたのかを評価したい。

討議題4

- (1) 教科書本文を扱う際, 生徒が興味を持って友と関わりながら学習できることを大切にしている。興味を引くような導入, 新出単語クイズ, 登場人物の気持ちを表現した音読を行った。(豊科北中)
- (2) 仲間と関わり合いながら既習文型をつかってまとまりのある英語で表現する喜びを感じさせたい。“My Future in Ten Years” という題でスピーチを書く際に, グループで相談したりアドバイスしあったりする活動を仕組んだ。(櫻ヶ岡中)
- (3) 入学当初から英語嫌が多い子どもたちが英語に親しみをもって学習できるような工夫を行っている。インフォメーションギャップなどを使ったゲームでは, 楽しんで活動する生徒も多いが, そこからレベルアップしていくにはどのような指導が効果的か。(南箕輪中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) つける力, Lesson goal の決めだし。実態把握, 素材研究, 評価の場面を考えてから, 1 時間 1 時間の授業展開を考える。1 時間ずつが単発にならないよう, 「今のこの学習は, …につながる」と

いう意識をもって授業に臨むことが大切。

- (2) 英作文のように、表現活動を行うときは、教師がきちんと目的をもってやらせないと、内容が広がりすぎて評価できなくなってしまう。正しい英作文を求めるならば、文章は1文でよいし、伝えたい意欲を大切にして複数文書くことを求めるならば2～3文書ければよい。また、学年末等に1年間のまとめとして自由に書かせるような場合も、自分の体験等を5～10文程度記述させるなど。
- (3) 中学校の英語学習で学び直しができることを伝え、英語の楽しさを子どもたちと一緒に味わうのだという信念を教師がもって、繰り返しそのことを子どもたちに授業を通して伝え続けていくこと。子どもがつまらなそうにしているからゲームを…ということではなく、「本気で学ぶ楽しさ」を教えてやってほしい。

(文責者 岡谷市立岡谷北部中学校 武井 香奈江 先生)

【第2分科会】

討議題1『書くこと』の指導と評価のあり方

- (1) 対話場面の場合に、例えば2年生の「Call」をつかった場面では、人物や食べ物やスポーツを考えて、写真を見て名前やニックネームを考える活動を行った。「What do you call her?」というような形でどのように呼ぶのであろうということを考えていく活動を行い、何回も反復し、表現を使って、生徒に答えさせる活動を行った。(豊科南中)
- (2) 90秒クイズと題して変換を行わせた。教科書の本文を暗唱させる。本校では常に暗唱を行わせている。カードにチェックをして、それを評価としている。全員が全部を必ずやるというわけではないが、積極的に暗唱を行っている。暗唱は、自分のメモリーとして蓄えている。そのため文字を書く時も積極的に書けるのではないだろうか。(両小野中)
- (3) ライティングで表現の幅にとらわれない、ピクチャーディスクリイビングを行わせてみた。ひとまず量をたくさん書いて、表現をたくさん書いてもらった。日本語の語順でなく、事実の羅列にならないようにということを指導し、一般動詞を与えて、それを基に書いてもらった。結果として、できる生徒は英作文のリストを見なかった。文の量は質としては上がっていると思う。(岡谷北部中)
- (4) 文章を書く時に子どもたちがなにを書くことがいいのか分からないということがあった。「それはいつなのか」「どこなのか」など、質問に返していくような文章にしていた。書いてもらったものをスペルチェックと文法ではなく、内容を図った。生徒からは、一番伝えたいことを最後にもってきて、強調したいポイントをまとめることなど書く力をつけることができた。(坂城中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) ALTから日本語英語を教えてもらうという。素晴らしい場面設定を学んだ。また視聴覚教材を生かして、ディスカッションを行っていることも大切な要素である。
- (2) さらに既習事項をいかに定着させていくのか大事である。音声をいかに書かせることにつなげていくかということが今日のテーマである。小学校は、音声中心なので中学校はそこを理解したうえで指導をしていく。
- (3) その具体は、絵を見せながら考えていくということが大切である。今は視聴覚機器が充実しているのでそれを見せて考えていくということも大事である。また、全体でやって個に返すということが大切。何回もやると子どもたちはしっかりと獲得していく。

討議題2『話すこと』の指導と評価のあり方

- (1) 人を紹介するという授業において、当初はALTがディズニーを紹介して、生徒が安心していけると思ったが、そのクラスは間違えると怖いという静かな雰囲気があったので生徒の実態として導

入が効果的でないことに気づき、授業者がカーネルサンダースについてスピーチを行い、日本語であえて言うことも行った。間違ってもいいから英語を使っていこうとすることが大切である、ということ認識することも必要だと思った。(筑北中)

- (2) インタビューしたことをもとに生徒が自分達で新聞を作成した。トピックインタビューをして、聞き出したことをメモしていく。また、そのうえで、どんなことを聞き出せたのかを基に考えていく。成果としては、友の新たな一面を知ることができ、またそれを知るために自然と英語を使っていくことができた。インタビューは話を高めることが分かった。(附属長野中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 帯活動はどこでもやっていることだと思うが、あまり時間を圧迫しないように工夫してほしい。音声面で英語を話す体になるという点ではとてもいいと思う。そのような基礎トレーニングは大事で、継続していく必要がある。
- (2) いま、中学生は話しているが考えて話しているかというところが課題と言われている。日々これについて情報を交換していく必要がある。
- (3) 観点について考えたときに、相手のスピーキングが伝わったかということと、アイコンタクトや声量と一緒に評価されてしまう。内容と方法の評価を同様にを行うのは難しい。スモールステップで、伝えるためにアイコンタクトや声量に気を付けることが必要になるということ子どもたちに理解させたい。
- (4) 観点はとても大事で、なにかを作成する前に、このようなことを大切にしたいという願いを観点として共通理解し、事後にその観点で評価することが必要である。そしてその観点を子どもも同じように大切に感じているということも重要である。それが子どもの主体性になってくる。

討議題3 「4技能を総合的に育成する場面設定のあり方」

- (1) 自分達で松本の魅力を考えておすすめの場所を外国人に伝えるためのパンフレットを作成するという単元を行った。授業に外国人数名を招いて、実際に作成したパンフレットにアドバイスを貰い、アドバイスをもとに書き上げていった。実際の会話場面で英語を使い書き上げるという必要感から相手の思いを受け止め自分の思いを伝えるというコミュニケーションの喜びを実感することができたのではないかと考える。(附属松本中)
- (2) 長文を読み解く場面で、日本語での話し合い、個人で本文を読んで、左側に英語の本文右側がヒント、これで内容理解を個人でさせ、それぞれ観点で話し合いをした。そのあとに、問題を個別で解いた。個々の学力は低いですが、グループ活動をすることで意味を分かってほしいと思った。転入生が多いので自分の答えをなかなか発表できない。友達と感想を述べ合い、安心感を得ることができたのではないかと。(高陵中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 英語における探究的な学びはとても展開がたいへんである。探究的な学びを展開しようとするほど教師の準備が必要になってくる。
- (2) 長文の要約は難しい活動であるが、誰に伝えるかという相手意識が明確になっていくと意味が明確になっていく。グループ活動は学び合いが生まれるようにすることが大切である。例えば、学力差に関わらず楽しく取り組めるゲームのような活動があるとよいと思う。また、「What is happiness?」などの答えが多様で簡単なものがないと思う。自分の経験ではペア活動ができないところはない、あきらめずに挑戦してほしい。

(文責者 信州大学教育学部附属松本中学校 宮澤 優 先生)

【第3分科会】

討議題1 『書くこと』の指導と評価のあり方(1)

①効果的な文法事項を使ったパターン練習とは

- (1) call A B の導入で、見たことのある人物のピクチャーカードを使い、テンポ良く口頭練習を行った。その後、We call this ○○○○ in Japanese. What do you call it in English? の文を使い、日本語ではこう言うものを英語では何と言うかを先生に聞く活動を行った。聞いた英語をワークシートに記入するが、スペルに意識がなくなってしまった。(豊科南中)
- (2) 口頭練習では、見とどけ方法と評価が重要。簡単な英語表現を繰り返したり、言い換えたりしながら何度も言えるようにテンポを大切に、使いたい文法が言えているかを評価する。(丸ノ内中)
- (3) 1年生の can の導入でのパターン練習として、JET が生徒一人に“Can you~?” と質問をし、質問された生徒は、“Yes, I can.” か “No, I can't.” で答える。答えを聞いた JET と生徒全員で、○○○ can ~. と口頭で言う。最初は簡単な動詞で始めていき、段々と動詞のパターンを増やしていった。JET が全員に質問して、全員が答えることができるように行った。(戸倉上山田中)

②Writing 活動に至るまでの活動・Writing 活動におけるスローラーナーに対する支援の方法

- (1) 3人称単数現在形の定着を図るために、先生方へのインタビューを行った。生徒自ら英語で質問を作成し、インタビューもできるだけ英語で行った。インタビュー後は聞き取った内容をもとに、3人称単数現在形を使った文を入れながら自分が質問をした先生を紹介する文を書いた。その後の授業の中でも、3人称単数現在形を使った文の口頭練習や小テストなどを行い、定着を図った。口頭においても記述においても s または es をつける意識で行えた。(戸倉上山田中)
- (2) 3人称単数現在形の s や es を意識させる Q&A を作り、プリントで配布して繰り返し取り組ませる。少人数教室 21 名いる中で約 10 名が、スローラーナーなので毎回生徒が行ったプリントは回収して、朱を入れて返却している。スローラーナーが間違ってしまう箇所をおさえて個別指導を繰り返しやり、定着を目指して行っている。(筑摩野中学校)

討議題 1 『書くこと』の指導と評価のあり方 (2)

③正しい語順で英文が書ける生徒を育てるための日ごろの工夫について。

- (1) 英作文を書く際、出されたテーマについて、自分の伝えたいことを一貫した内容になるよう文をつなげる生徒の姿を願った。「行きたい場所」というテーマに対して、その場所でしたいことをただ箇条書きのように繋げることを改善させるため、マインドマッピングを取り入れて英作文指導をした。身近なことをテーマにしたいと考え、「担任の先生紹介」で実際にマインドマッピングを取り入れていた。最後に 4 人グループで発表し合った。(広陵中学校)
- (2) 正しい語順で英文を書ける手立てとして、教師のモデル文や教科書のモデル文などを聞かせること、次に少しの文法ミスは気にせず間違っても良いので、会話の中で使えるようにさせること。最後に会話したことを書かせる。書いた英文は、必ず教師が見て評価をする。正しい語順で書ける生徒は、正しい語順で言うこともできる。(丸ノ内中学校)

④生徒が文法のミスをせずに作文するための手立てについて

- (1) 英語に対する苦手意識をもつ生徒や、英語が好きでも「書く」ことに対して抵抗感をもつ生徒が、自らの考えや思いを積極的に表現できる姿を願い 1 年生の授業で、「オリジナルキャラクターを育てよう」という単元名で授業を行った。既習表現を用いて、オリジナルキャラクターの紹介文を 4 ~ 5 文書き、4 人グループで互いの紹介文を紹介したり、質問して 2 文以上の英文を書き加えたりして紹介文を完成させた。3人称単数現在形の s が抜ける生徒がいたが、全員が 2 文書き加えることができた。各単元のまとめで書かせているので年間で 10 回位行っている。英文の内容でオリジナリティーを出せるように指示を出し徹底させた。(丸ノ内中学校)
- (2) 興味を持てる題材にするために、家族や友達の絵を描かせて紹介文を作る授業を行ったことがあ

るが、生徒の意識が英文を作ることよりも、絵にこだわる生徒が多くなってしまった。英文の内容にオリジナリティーを出せるように指示を出すことは、とても重要だと思いました。3人称単数現在形のsが抜けていても段々と意識して書けるよう支援をしていく。(筑北中学校)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 豊科南中にはラミネートでの写真が教科での財産になっている点がとても良い。callのパターン練習では、代名詞を何回もhimで取り組ませて全員がhimと言えるようになったら、女性の写真に替えてherを導入するようなスモールステップが大事。
- (2) 毎時間、対一の英問英答を必ず全員とする授業は素晴らしい。三人称単数現在形のs, esについては、小学校での英語授業では主語がIかYouしか出てこないのに、s, esが付いた一般動詞には触れてきていない。s, esの習慣がないので、繰り返し学習していく中で身に付けていけばよい。
- (3) 日ごろの帯活動では、その単元でつきたい力を付けることができるような活動を考える。そのため、パターンを多く持っていることが大事。語順では、主語・動詞をわかること。主語に(), 動詞に_____を書くだけの活動でも繰り返して行えば力がつく。
- (4) 丸ノ内中学校の岩村先生は、“キャラクターを使ったwriting”を継続して行っている。その中で、生徒の様子を良く見て、良かった点・改善点を常に観察して試行を凝らしていて素晴らしい。英文にオリジナリティーを出させることで、同じ絵でも違ったキャラクターが出来上がる。

討議題2『話すこと』の指導と評価のあり方

①自分の感想や意見を述べながら対話をすすめていくことのできる手立ての在り方について

- (1) 話を展開する力を高め、新聞「My Friend's Times」を作成するために、友から情報を聞き出すことができる生徒の姿を願った。①詳細情報、②関連情報、③感想をまとめた「I-Point」を使い相手から情報を引き出す際の観点として意識させた。また単元の帯活動として、教師が設定した話題について互いにインタビューをし合う「Topic インタビュー」を行った。どんな新聞にしたいかを考えてどんな質問を相手するか記入し相手の情報を書き留める「Keyword Catcher 2nd」を使い、得た情報の中で更に聞き出したいと思う情報を2回目のインタビューで聞き出すことができた。インタビューだけでなく会話を楽しめると更に良かった。(附属長野中)
- (2) 対話活動では、話すことの指導事項で「(エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。」とあるように、「つなぎ言葉」や「相づち」を使い、会話を継続・発展させる点に重点をおいて行っている。(諏訪南中)

②生徒の実態をどのように把握し、どのような支援をすることで目指す生徒の姿に迫れるか。

- (1) 生徒が「英語で話したい」「英語で話せてよかった」と実感できる授業をつくりたいという授業者の願いに沿って、生徒の実態把握から目指す生徒の姿を明確にして授業を行った。生徒は、自分が紹介したい偉人についてスピーチをし、それをもとに問答しながらどのような人物なのかを明らかしていく活動を通して、その場で質問を考えたり応答したりする力を伸ばすことができた。(筑北中)
- (2) 信教全県研究大会で筑北中の授業を見させて頂き、大変勉強になりました。ピクチャーカードに数字や絵が描かれていたので、スピーチを聞く生徒がWhat's this?やWhat's the number?などすぐ質問しやすい工夫がされていました。とても参考になりました。(丸ノ内中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 手立てがとても細かく、段階的に行われていて素晴らしい。Do you~? に対して Yes, I do. で終わることの勿体なさ。何か一文付け加えて答えさせたい。Yes, I do. や No, I don't. だけでは、小学校英語。それプラス一言えることが中学校での英語学習。
- (2) 読む活動から話す活動への流れがとても良い。生徒が作成したピクチャーカードが工夫されてい

た。スピーチを聞く→ピクチャーカードを見る→質問を考えて発問する活動の流れが、聞く力と書く力を関連させながら伸ばしていける。

討議題3 「4技能を統合的に活用するコミュニケーション能力の育成について」

① 習表現を使い、目的を持って自己表現し、友と学び合うことができる学習はどうあるべきか

- (1) 「的を絞った文法指導」、「反復練習方法」、「生徒の意欲を高める指導」。この3点が授業をする上で教師の課題だった。状況を改善するために、リズムにのって文法を学習できる「ラップ de 英語」という教材を用い疑問文の作り方や答え方の復習に焦点を当てて、“My favorite ○○”についてグループ内で質問をして答える授業を行った。(諏訪南中)

② 「話すこと」と「書くこと」の技能を統合的に活用して、コミュニケーションを図ることができるためのグループ活動のあり方。英語を使って「伝えたい」と思う必要感のある場面設定について

- (2) 「教科書の本文を基に対話活動を行い。具体物を使用して“Where is～?”で質問し、“It’s前置詞～”で答えるグループ活動を行った。その後、書く活動を位置付けた。普段の生活でも、消しゴムを無くした時に「消しゴムどこ?」と英語で言えるようにさせたい。導入場面の場面設定が大切。

<指導者の先生のご指導>

- (1) どこで活用していくか。またどんな活用場面と繋ぎ合わせていくかが大切。場面があって活用されると更に良い指導法になる。リズムで覚えていける点が良い。
- (2) 複数の領域を意図的に含んだ授業が大事。「word-tree」という方法→英語を聞いて、キーワードを書き留めて線で結んでいく。その図についてペアで英文にして言い合う。聞く活動・書く活動・相手に英語で話す活動と統合的な指導になる。

(文責者 諏訪市立諏訪中学校 神津 明夫 先生)

【第4分科会】

討議題1 「基本表現を定着させるために有効なワークシート、教材はどのようなものがあるか」

- (1) 生徒が新出表現を正しくかつ不安なく使えるために、導入後に基本文の板書を残し、写真や絵を使いながら進出表現を十分に反復練習した。その後、新出表現を用いたグループ活動へ移った。グループ活動では生徒が「新しい表現を使いたい」「知りたい」と思えるような教材と活動を考えた。PCを用いて低位生でも分りやすいように行った。(豊科南中)
- (2) 授業の中では、抽象的な意味のある語や文、難解な意味や構造を持つ文を除いて、ほとんど日本語訳を扱わず、大意を取れたと思われた時点で、日本語訳の書かれたシートを配っている。そのシートに重要表現と思われる部分に下線を引き、本文中の中から、英語表現にあたる部分を探させるワークシートを作成しているが、そのシートは有効であるか。読解力をつけさせていく上で、他校ではどのような工夫をしているか。(両小野中学校)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 「曖昧さ」というものに耐えながら学習していく中で既習事項を繰り返し使っていく。新出表現を導入の場面・活動、練習・教科書・他の表現活動の中というように段階的に使っていくことが重要。小学校での外国語活動にある「慣れ親しんでいく」という意味での手立てを大事にしていくこと。その日で完璧にすることではなく、曖昧さの中で既習段階的に慣れ親しんでいき最終的に生徒の記憶に残していくような活動・手立てをし、評価していくことが大事である。
- (2) 教科書の文を全て分かることでなく、何をどういう風に分かっていくのかということを大切にしたい。長文を読めるようにならないといけないという出口に向かって、大意を読み取れるような読み方、「a」と「the」の違いや代名詞が差しているもの、thatの内容などをきちんと理解していくことを踏まえて大まかに捉えていくような指導をしていきたい。また、生徒に「考えながら

英語を使っていく力」をつけさせたい。

討議題2「児童・生徒の異年齢交流活動を通じた小中連携のあり方」

- (1) 小中一貫校の特性を活かして、合同授業において8年生が5年生に英語を教える機会を設けた。自分たちの今までの学習を用い、積極的に関わろうとする8年生の姿が多く見られ、5年生には多少難易度の高い表現を教えながら自己紹介文の発表のための支援を行った。5年生は8年生と活動することで英語に対する抵抗感が減ったり、これからの英語活動に楽しみを感じる児童もいたり、合同授業がお互いの英語学習への意欲が高まる相乗効果を生み出す結果となった。(信濃小中学校)
- (2) 中学校教頭による外国語活動の出前授業を行い、単に中学の前倒しでも、アクティビティアイデアの披露だけでもない「授業づくり」を主眼に置いた展開を試みた。「導入、展開、まとめ」「授業がもっとよくなる3観点」「思考力、判断力、表現力等の育成」を伴った授業は、all English 神話や、児童の物足りなさなどの課題に対応する大きなポイントであることが実感できた。(開田中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 相手が自分よりも下の子だから相手の理解力を気にして丁寧に説明したり音読したりと、相手を意識して活動を行えることがよい。小学校の外国語活動で行っていることが中学校につながる。ALTの口を見て発音を覚えたり、英語を聞いたりしてstep by stepで覚えていくことが大事。人や相手のことを知れるような活動をしながらか表現を定着させていけるような活動をしていきたい。中学校では特にパターンプラクティスだけでなく、場面設定を大切に考え自然と使えるような手立てを工夫していきたい。
- (2) 小中連携において友達との関わり方に重点を置いた活動を増やしていきたい。また、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」で子供に合わせて指導する順番を変えていくことも有効である。ただ「聞くこと」を通して英語の内容理解につなげていく。指導の中に柔軟性をもって子供達に合った授業展開をしていくことが大事である。

討議題3「課題意識をもち、相手の意図を理解して聞きたいことや伝えたいことを書くことができる生徒の育成、『話すこと』における評価のあり方」

- (1) グループ対ALTでのチャットを通じたコミュニケーションの楽しさを味わいながら、相手の好きなものを聞いたり、ALTからの質問に答えたりすることを通して、相手の意図を理解して聞きたいことや伝えたいことを英文で書くことができるようにした。一方で生徒の課題意識のとらえや課題設定の運び方、ALTとJTEとの連携、ALTと生徒とに距離があったことが課題として残った。(長峰中)
- (2) 目的と相手を明確にした単元設定や、生徒と実態把握から目指す生徒と姿を明確にして具体的な支援を行う授業を構想した。生徒は、自分が紹介したい偉人についてスピーチをし、それをもとに問答しながらどのような人物なのかを明らかにしていく活動を通して、その場で質問を考えたり応答したりする力を伸ばすことができた。(筑北中)

<指導者の先生のご指導>

- (1) 生徒にどんな質問をすればよいかを考えさせながら活動させる、意識させる手立てが面白い。ALTと生徒がコミュニケーションを図る場面を作ることも大切である。
- (2) 単元の中で目指す姿を明確にするための手立てが良かったと考える。単元を通して見通しを持つ教材作り、活動内容が有効であった。教師だけでなく生徒も見通しを持って学習できるように心がけていきたい。また全て英語でなく「日本語を使っても良い」という安心感を与えることが生徒の英語に対する不安感を少なくしていくことができる。

討議題4「生徒が興味・関心を高め、意欲的に学ぶための場面設定の工夫と、既習表現を活用しながら Lesson Goal を達成していくための手立てのあり方」

- (1) 話を展開する力を高め、新聞「My Friend's Times」を作成するために、友と2回のインタビュー活動を設け、その構想を立てる活動から位置づけた。新聞に載せる情報を聞き出すためのインタビューをまとめ、2回のインタビュー活動では観点を意識して新聞に載せる情報を聞き出すことができた。このような姿から手立ての有効性が明らかになった。
- (2) 外国人講師や留学生を学校に招いて、生徒が、地域に住む外国人と出会って交流をしながら、英語を使いたくなる状況を作ったり、諸外国について知りたくなるような話題の資料を持ち込んでくるような支援をしたりした。生徒は外国の異文化や多彩な生活様式を感じながら、今まで外国人が生活していた背景等から相手の思いを受けてとめていき、既習表現を活用して、辞書や表現集などから自ら新たな英語表現を獲得していきながら、相手に伝えたい自分の思いを整理していく生徒の姿に出会うことができた。

<指導者の先生のご指導>

- (1) 情報を整理して、尋ねるポイントを明確にして質問できるような手立てが大事である。「どんな質問をしたか」でなく「その質問にどういう意味があるのか」というところを生徒に押さえていきたい。そして附属中だから「できる」ではなく、その手立ての考え方を是非各校で参考にし、生かしてほしい。
- (2) 人との関わりの中で必要感を持っている英語指導がよい。教科として英語があるからということだけでなく、「この人と関わりたい」という気持ちや必要感の中で英語を学べるという発想が大事だと思う。また、生徒に、「できなかった」ことが「できるようになった」という経験をたくさんさせたい。

(文責者 松本市立鎌田中学校 金原 悠 先生)

V 本年度研究会の反省と来年度への方向

◎本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・よい。 ・4技能すべてを含む大きなテーマであるので、継続していきたい。 ・興味深いテーマだった。 ・それぞれの分科会にあったテーマだったと思う。 ・そろそろテーマを変えてもよいかと思う。Can-do リストなどに触れて、カリキュラム的な方向はどうか。 ・授業の構想化にあたって、「Today's Goal の掲示」と「評価の在り方」のように目標を掲げることに焦点を当てたいなと思いました。 ・構想化という言葉が良く分からない。 ・授業の中でどのようにコミュニケーションする力をつけるかがとても悩みます。考えていきたいテーマだと思います。 ・英語という教科について研究する上で、とても大切だし、評価が難しいためとてもよいと思いました。 ・英語科における評価の方法について、can-do リストの導入もあることを考えて、方向性に盛り込んであるのは、今後のために役立つと思います。 ・全県テーマというのが、どこで、いつ示されていたのか不勉強で知りませんでした。授業の構想化というのが何だかよく分かっていません。すみません。

	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの基礎をつける力の第一に考えることは、ぜひ毎年の課題にしてほしい。
○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の実施に大変役立つが多かったと思います。 ・他の先生方の授業も見せていただき、授業の構想、評価の仕方についてもお話を伺い、自分の授業の参考にさせていただきました。 ・それぞれの先生方が実践されていることを学ぶ機会になりました。いろいろな観点から考えられたので参考になりました。 ・研究内容をもっと周知させる手立てをアピールするとよいと思う。(全県テーマと各校のテーマの関連はあまり意識されていないのが実情。 ・もう少しテーマを意識した実践になるとよい。 ・話す、聞く力の評価、とても勉強になりました。 ・たくさんの人の研究、研修を聞くうえで、学ぶことがたくさんありました。 ・各校コミュニケーションということを意識している研究が多いように思います。また、子供の具体の姿で、挑戦されている印象があります。 ・「評価」という点についてはうまくいかず、JTE 単独ではよくても、ALT との TT になると授業の目的が伝わりきらないことが多い。
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・「聞く、話す、読む、書く」という4技能で分科会を分けたり、討論をするが、「教材化のアイデア」「評価の仕方」「言葉の習得の理論面と実践のつながり」などの観点で話し合ったりしてみたらどうだろうか。 ・コミュニケーションの基礎を養うということが、どこまでできれば OK とするのが難しいです。 ・関連性がよくわからない。 ・授業の振り返り、実態を伝えてもらえると、とても分かりやすく勉強になりました。 ・この研究であっても、このような場があることで実践を共有できていいと思いました。 ・たくさんの意見が出ていて参考になるものばかりだった。
○研究集録等の Web ページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・HP から日程等のプリントをダウンロードできるのもよかった。 ・当日配布または web 掲載の方向、どちらでもよいと思います。苦勞ですがよろしくお願ひします。 ・HP に文書の書き方等を載せていただき、分かりやすかったと思います。 ・先生方、生徒のみなさんの細やかな気配りが嬉しかったです。 ・HP はよく見させていただきました。便利です。(スマホでも見られるので) ・レポート(印刷されたもの)の印刷部数が多すぎる。連合教科会の立派なサイトがあるので、そこに PDF ファイルでアップして閲覧できるようにするなど、情報を電子化していくことが必要だと思います。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の意見を言い合える雰囲気を作ってください、大変ありがたかったです。緊張がほぐれ議論も深まりました。 ・とても丁寧にご案内いただき、初めての参加でしたが、安心して参加できました。当日も生徒さん方に明るく親切な対応をしていただき、清々しい気持ちになりました。 ・運営の方お疲れ様です。貴重な勉強な場を与えていただきありがたい。 ・レポートの提出や連絡のやり取りはメールがよい。 ・レポートは当日持参でもよい、という点でとてもありがたかったです。 ・レポート提出が、時間的に余裕があり負担が少なくよかったです。 ・事前に FAX で送っていただいた発表順と HP に掲載された司会計画の発表順が違って、どちらにしてよいか困りました。

	<ul style="list-style-type: none"> ・メールでなく、文書として手元にあると嬉しいです。 ・実証授業の関係でメール添付でなく郵送となったのが、少し大変であった。できればメール送付がありがたい。 ・申し込みがぎりぎりになってしまい、レポートの準備や連絡等が遅くなってしまい、申し訳なかった。当日の細かい日程を前々日に知ったので、もう少し余裕をもって知れるとよかった。 ・担当者が受けていたので、メールの使用についてはよくわからない。当日の附属中の先生方、生徒の方の準備には感謝。 ・レポート提出が負担です…。
--	--

◎来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のままでよい、継続。 ・主眼の設定について。 ・小中連携、小学校の外国語活動を踏まえた中学校の授業の在り方が大きな課題になると思う。 ・そろそろテーマを変えてもよいかと。Can-do リストなどに触れて、カリキュラム的な方向はどうか。 ・今後の教育課程や小学校英語の変化をふまえたテーマ（または、分科会または、各分科会でもそれについて語れる時間があればありがたかった。） ・4技能のうちのどれか一つに焦点を絞ったテーマでもよいのかなあと思いました。でも幅が広く…。 ・全県テーマを2週間ほど前に知ったので、自身本校との取り組みと関連性を持てなかった。研究会でも、全県テーマがなぜ立てられているのかよくわからなかったので、どういう目的があるものなのか知りたい。 ・批判的に読むための手立て。 ・コミュニケーションを焦点においてほしい。 ・評価の在り方とあるべき具体の姿。 ・教科書の活用法や内容に関連した授業展開について。 ・コミュニケーションの基礎、特に、「かかわり力」をつけることに重点を置きたい。
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のままでよい、継続。 ・オールイングリッシュ、ICTなどに特化した分野もあつたらと思いました。 ・Reading を inferential な部分まで読み深め、次の活動につなげる。 ・Can-do リスト導入に向けて評価について研究していくべきだと思います。特にその方法の具体を知れたらと思います。 ・教科書の本文や Reading Plus の扱いについて授業でどのように指導に活かしているか。 ・英語のあいまいさを特徴として、かかわり力をつけながらコミュニケーション能力を高めさせたい。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のままでよい、継続。 ・久しぶりに参加させていただいた。レポートの範が昔ながらの形式で出されているのと反して、レポートの発表はプレゼンテーションソフトを使う方が視覚に訴えて、直感的に分かりやすいので、そのタイプの発表の方が好まれるかと思います。これからは研究の方法はともかくレポートの発表はプレゼンテーション方式と決めるのがよいかと思います。 ・来年度も他の先生方の授業を見させていただくとともに、研究会などにも積極的に参加

	<p>したいです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Lesson Goal を通して学期ごとでもよいので、どうだったか研究できたらいいと思いました。 ・ 各校での研究で行うのが良いと思います。
○その他, 改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 違う方向からきたら駐車場の入口が分かりにくかった。(案内の人を通り越してしまった) ・ 授業のためにそれぞれ参考にされた論文, 書物等教えていただけると嬉しいです。 ・ 授業日に行くことで, 参加しづらい先生方が多くなってしまいが, 変更も難しいでしょうか。 ・ どの先生も素晴らしい研究をなさっているので, 発表や質疑応答の時間が少なくなってしまいました。そこだけ残念です。 ・ 授業との兼ね合いもあり, 1日という時間の長さからも半日開催でもよいのではないかと考える。1日であるのなら, 授業参観→研究発表はどうでしょうか。 ・ レポートなしでも参加できる方が良いです。(今回も必ずということではなかったようですが, 何か持参をという傾向が強くなって抵抗がありました。) ・ 生徒に受付をさせる必要はないと思う。しかも女子のみ。教師自身が運営すべきです。 ・ 代替で参加しましたが, 大変参考になりました。明日からの指導実践につなげていきます。ありがとうございました。 ・ 一般参加者の受付時刻が分かりにくかったです。メールで知らせていただくと嬉しいです。 ・ 私も含めて, 実際の生徒の学びの様子がわかる視聴覚機器があると, よりよい。 ・ 遠方の方のことを考えると, できれば, 会場にパソコンがあり, USB 持参で済むようになると思います。 ・ 周りの様子を見てみると, まだまだ参加への敷居が高いような気がします。

VI あとがき

本年度も県下各地より多くの先生方にご参会いただきました。お集まりいただいた先生方のレポートには、生徒のコミュニケーション能力の基礎を育成するための具体的な手だてや、教科のあり方についてまとめられたものが多く見られました。先生方の日々の実践に基づいて生徒の具体の姿から熱心に協議を深めていただき、明日からの実践に役立つ大きな成果をあげて研究会を閉じることができました。

今年度も4分科会での開催となりました。先生方の積極的なご発言等により、活発な討議となりました。終日にわたって全参加校の研究内容と今後の方向についての的確なご指導、ご助言をいただきました指導者の宮下 佐知子先生、細江 洋司先生、三井 康幸先生、清水 秀明先生、レポートをくまなくお読みいただき、綿密な司会計画により協議を深めていただきました司会の池田 司先生、深井 信雄先生、平野 朝将先生、富山 貴子先生、また、当日の記録及び研究集録のまとめに多くの時間を割いてご尽力いただきました記録の武井 香奈江先生、神津 明夫先生、金原 悠先生に心より感謝申し上げます。そして、お忙しい中、日々の実践をレポートにまとめ、熱心に協議に参加され、研究会を実りあるものにしてくださった参会の先生方に心から感謝申し上げます。

来年度も多くの先生方が参加され、英語教育のあるべき方向を求めて、より有意義な研究会にさせていただくことを願い、また、先生方の今後の一層のご活躍を祈念申し上げます、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

委員長 矢島 裕文
副委員長 木下 耕一